

博物館に求められること
— 大阪市立自然史博物館での経験から —
佐久間大輔

2つの前提

1. 博物館は、それぞれになりたちの歴史、場所、博物館に集まっているコレクション、そこにいる学芸員の専門性が異なり、それによって求められることが違います。なので大阪の話が明石にそのまま当てはまるわけではありません。
2. 博物館は、市役所や国がどう考えるかも大事ですが、そこで働いている人がどういう場所にしていきたいのか、そして使う人・関わる人がどんな方向に背中を押すか、一緒に走るのかも大事です。

1. 博物館がどうあるべきか、どうありたいか

無茶言われたときに、言い返せるためにも。



博物館のステークホルダーは 誰でしょうか？

博物館は誰に対して責任があるのでしょうか？
「われわれの博物館」という意識を持っている、あるいは利害関係を持っている、またはそのように感じているのは誰でしょうか？

- 納税者
 - 公務員
 - 学界
 - 利用者
 - 将来の世代
 - 職員
- 地方および国の政治家
 - ビジネス業界
 - スポンサー・寄付者
- ユーザーコミュニティ、友の会として
博物館の支持基盤を組織化

ステークホルダー不在、あるいは多様なステークホルダー間の対話がない、というのが一番危険

- 市長や市役所が何も関心を持っていない
- 将来を考えている職員がいない、あるいは考えても長くいられない
- 博物館を一緒に支えていく利用者集団がない
- 外部の専門家グループや関連分野のアマチュアや地域の住民が博物館に関心を持っているか
- 「広く薄く人数を集める」も大事だが、真剣にともに博物館を支えてくれる人があちこちに必要

博物館は社会の中で存在する



- 専門家の権威だけでも
- 住民ニーズだけでも
- 行政の意向だけでも
定まらない／成立しない
- 三者が方向を同じくすると機能を発揮

博物館の活動
ミッションと
SDGsとの関係を
確認するWS
(2022.10)



問い直し、博物館の活動を再検証し、改善

- スーパーゴールを再認識

「自然の探求と、人と自然が共存する豊かな社会の実現を図る人材の育成」

- そのためにこの博物館がすべきこと
→使命、具体的な中期計画

自然の情報拠点

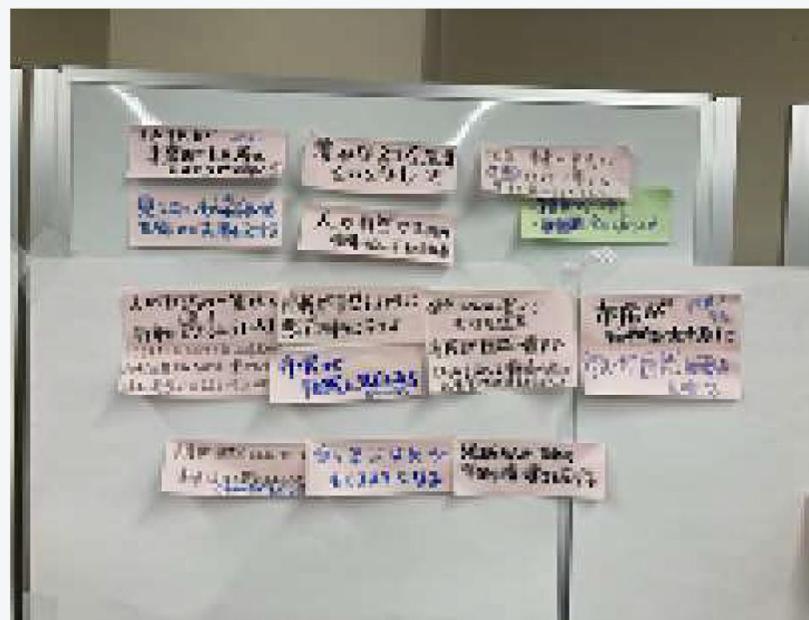
好奇心を刺激する社会
教育施設

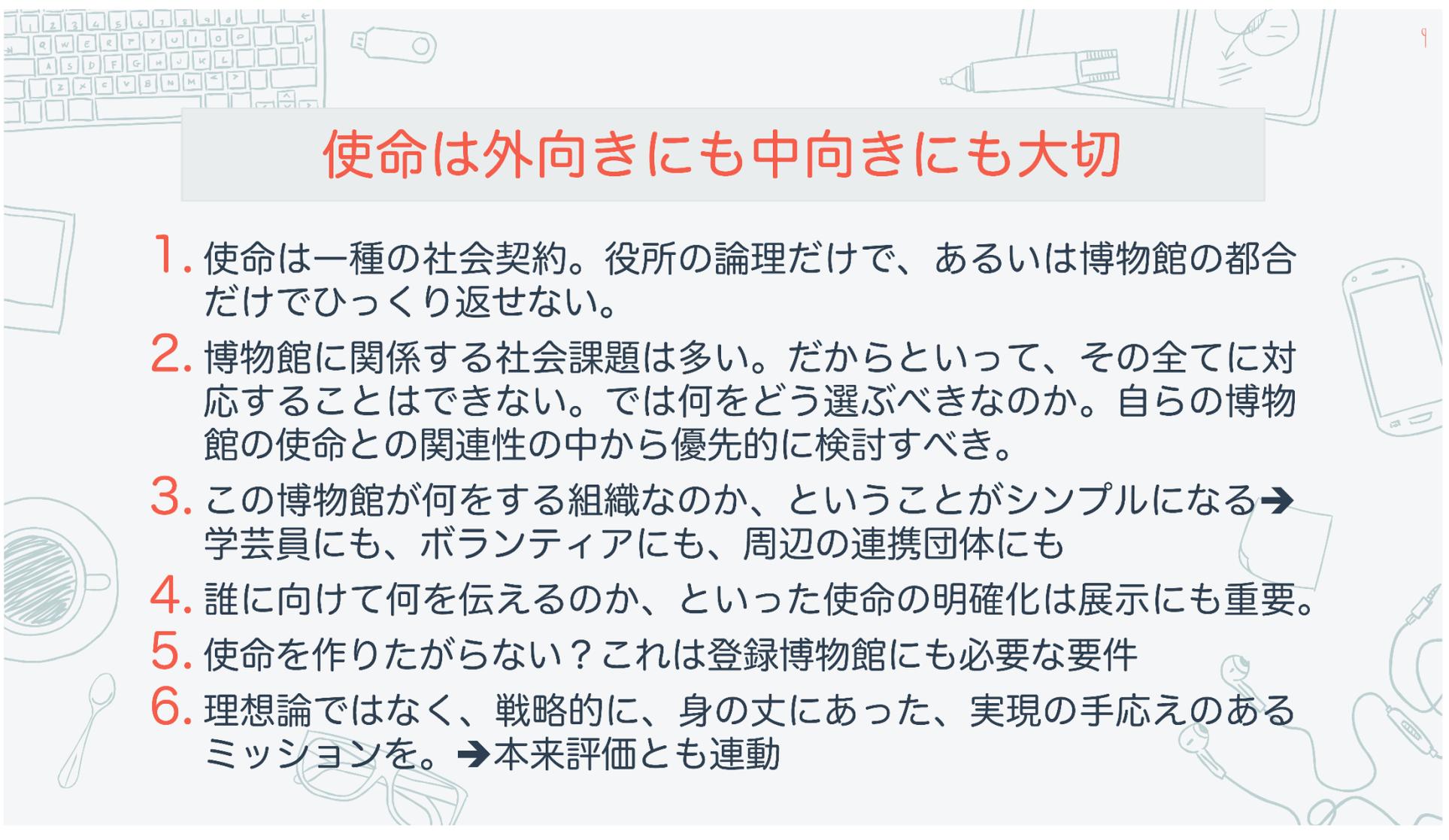
市民協働

機関連携

公共経営

- 内外に「うちの博物館はこうなんだ」と示す。





使命は外向きにも中向きにも大切

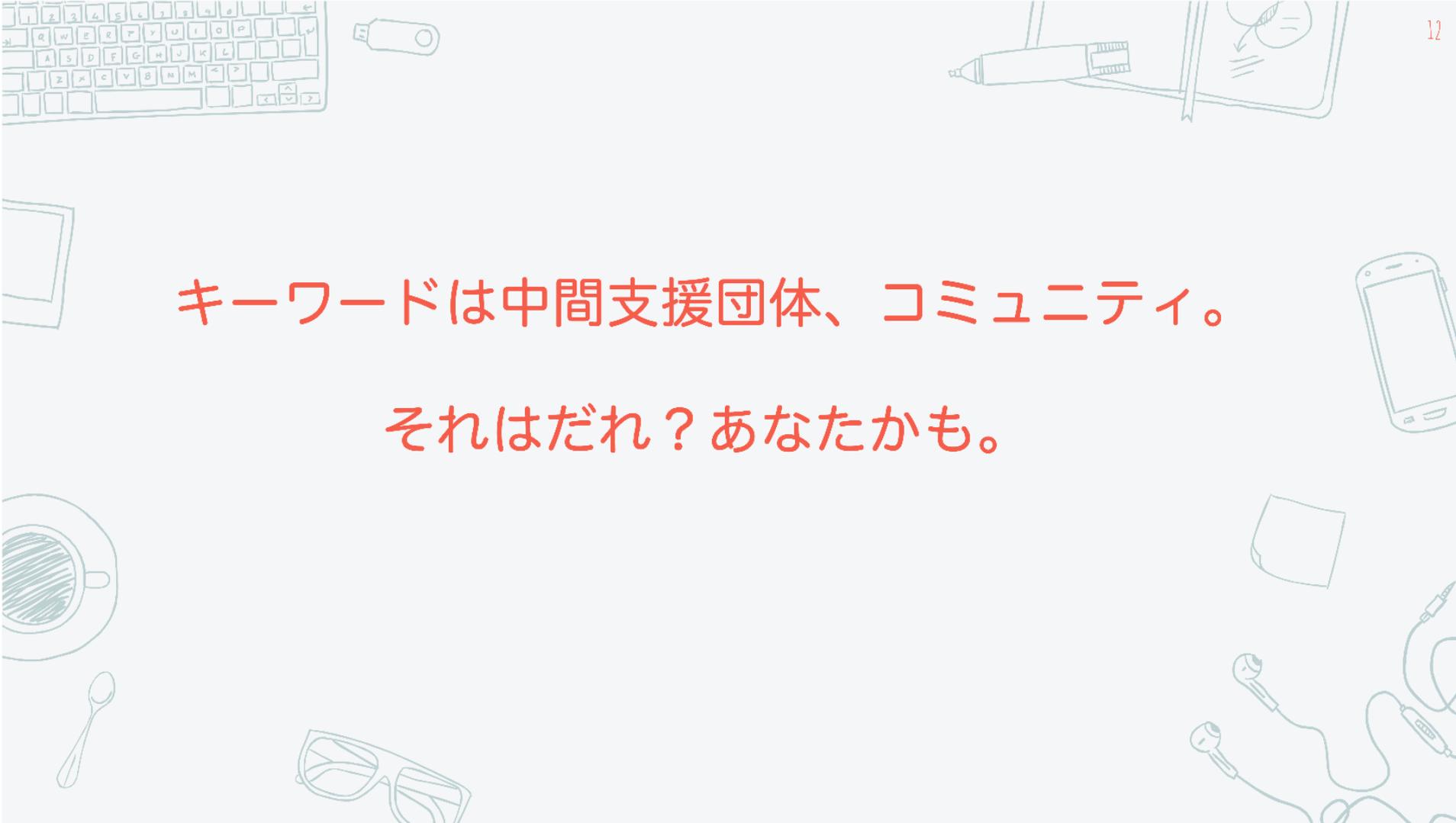
1. 使命は一種の社会契約。役所の論理だけで、あるいは博物館の都合だけでひっくり返せない。
2. 博物館に関係する社会課題は多い。だからといって、その全てに対応することはできない。では何をどう選ぶべきなのか。自らの博物館の使命との関連性の中から優先的に検討すべき。
3. この博物館が何をやる組織なのか、ということがシンプルになる→学芸員にも、ボランティアにも、周辺の連携団体にも
4. 誰に向けて何を伝えるのか、といった使命の明確化は展示にも重要。
5. 使命を作りたがらない？これは登録博物館にも必要な要件
6. 理想論ではなく、戦略的に、身の丈にあった、実現の手応えのあるミッションを。→本来評価とも連動

連携はファッションでなく戦略 そして長続きのためには「互恵的」に

- 博物館で何かをやるうにも、常にリソース（お金、人材、アイデアなどなど）は不足している→博物館単独で何かをやるうと思っても、実現できることはごくわずか。
- 誰とどう、連携するか？
 - 大学？ 県立博物館？（見返りに何を提供できる？）
 - 子育て、学校関係、福祉団体（本来事業なら予算の裏付必要、そうでないなら何を提供し、かわりに何を得る？）
 - 企業

文化博物館の周りに、どんな潜在的パートナーがいるか、一緒なら何ができるか、どう実現するか。全ては「妄想」、「野望」から。





キーワードは中間支援団体、コミュニティ。

それはだれ？あなたかも。